

郷土マーメイド

逗子市立図書館報
第27号

2023年12月27日発行

逗子市立図書館

逗子市逗子4-2-10

046(871)5998

<https://www.library.city.zushi.lg.jp>

没後25年特集 堀田善衛の世界

世界の争乱の地へと足を運び、歴史への深い洞察力をもって、個人の自由や尊厳をテーマに多くの作品を送り出した堀田善衛。執筆の場も東京、上海、逗子、信州、ヨーロッパ各地へと変転しました。没後二十五年、その足跡と作品をふりかえりま

富山から金沢

作家・堀田善衛は第一次世界大戦が終結した一九一八（大正七）年、富山に生まれました。生家は江戸時代から続く廻船問屋で、幼時より父の船でウラジオストックに同行するなど、国際的感覚が磨かれる素地がありました。実家にはよく俳人、画家、能役者といった人たちが出入りし、伝統芸能にも目が肥えていきます。しかしながら近代化の波に取り残されるように古い商家である家業は傾いていきます。

中学時代には金沢の親戚堀田楽器店に下宿し、ピアノやクラシック音楽に親しみ、

その後アメリカ人宣教師宅に下宿した際には英語を叩きこまれ、この時に身に付けた音楽と英語は彼の一生の財産となりました。

東京 戦争へ突き進む時代

一九三六（昭和一一）年、十八歳、入試のため上京した堀田は二・二六事件に遭遇しました。その後の学生生活はまさに国家が急速に戦争へと突き進む時代でした。故郷の富山で伝統文化に親しんだ堀田は、伝統が軽んじられ思想・風俗が目まぐるしく変わる東京に失望と無常観を感じ、慶應義塾大学法学部政治学科から仏文科に転科します。仏蘭西演劇研究会では、芥川比呂志、白井浩司らの学友と知り合い、詩の同人誌「荒地」に参加し、田村隆一、加藤周一らと出会います。（後に、『若き日の詩人たちの肖像』でこの戦争へと向かっていく混沌の時代に生きる若者たちを小説として描い

た。卒業後は「批評」の同人となり、小林秀雄、吉田健一らを知り、詩、エッセイ、評論などを発表しました。

東京から上海

東京大空襲と敗戦

一九四五（昭和二十）年三月一〇日堀田は東京大空襲を体験します。後に『時代と人間』の中で、乱世とはいわゆる中世時代のことをいうものだが、現代も非常な乱世ではないかと思いつたきっかけがこの町の大半を焼き尽くし十万人以上がなくなった空襲の体験だと著しています。そして同月二十四日、就職先の国際文化振興会から中国に派遣されるように画策し、大陸に渡りました。

終戦を上海で迎えた堀田は、敗戦国民として、中国国民党宣伝部に徴用されました。そこで中国共産党と国民党

との内戦の激化を目の当たりにします。

この上海での混乱と惨状の体験が後の創作の起点となっています。（上海時代を題材にした作品『祖国喪失』『歯車』『漢奸』『歴史』など）

上海から引揚 逗子へ

一九四七（昭和二十二）年、堀田は引揚船でアメリカ占領下の日本に帰国し、世界日報社の記者となります。

翌年九月、世界日報社解散のため退社し逗子に居を定めます。逗子では結核を患い療養所に入院することもありました。批評やエッセイ、詩、小説、翻訳などを発表しました。すまいは、逗子の海を見下ろせる高台にありました。

一九五二（昭和二十七）年、前年発表した小説『広場の孤独』『漢奸』ほかで第二十六回芥川賞を受賞し、一躍文壇の寵児となります。

佐藤春夫は選評で、

『広場の孤独』を読んで、今まで十年あまりの委員をつつて来た自分の知っている芥川賞の水準から推しても他にこれだけの力量を持った人がもうひとり居るだろうとは思わなかった。試みに手あたり次第に他の四五篇を読んで見た。堀田が断然ぬきんでいると思った。」

と激賞しています。（『芥川・直木賞名鑑』）

インド 第一回アジア作家会議

一九五六（昭和三十一年）年、ニューデリーで開かれた第一回アジア作家会議に、語学の才能を買われ日本で唯一の参加者としてインドに行きます。翌年『インドで考えたこと』を刊行しました。多様な文化宗教、過酷な自然と貧困、長大な歴史をかかえるインドを驚きをもって著し、卓越したルポルタ

ージュであると同時に戦後日本への文明批判として版を重ね、現在もインドの入門書としてロングセラーとなっています。

これ以降も革命途上のキューバ、独立と大国の干渉に苦しむアルジェリアなど各地に足を運び、世界を俯瞰するように、さまざまな文明批評、紀行を刊行していきます。（『上海にて』『キューバ紀行』『スフィンクス』）

『小国の運命・大国の運命』）

加藤周一は『小さな花』のなか

で、「いずれにしても『開いた精神』という言葉で私がいいたい彼の一種の感觸は、外国語や外国の文化についての知識とは関係がなく、もっと深くその人の世界に対する態度の根本に係るものにちがいない。」

と、日本に留まらず世界に開かれた彼の精神について述べています。

逗子の家と本が焼ける

インドからの帰途香港まで戻ってきた時、逗子の家が多く蔵書とともに火事で燃え落ちたと電話が入りました。この時堀田は、預かりものの多くの貴重な本が焼けてしまったことにつかりしながらも「イエグライナソボデモタツ」と家人を元気づける電報を打ちました。家は海をのぞむ丘の中腹にあり、入江をへだてた対岸に住んでいた石原慎太郎は後に、燃える火が海に映えて実に美しく、あんな美しい火事を見たことがないと彼に語った、というエピソードがあります。
『本屋のみつくりの私の読書』



スペインへ

一九七七（昭和五十二）年、時代の証言者ゴヤの生涯を描いた『ゴヤ』を完成させた堀田は、スペイン各地へ旅行します。そして以後一九八六（昭和六二）年まで、妻れいとスペインを中心にヨーロッパ各地に滞在しながら執筆活動を続けました。



『方丈記私記』と『定家明月記私

抄』『ゴヤ』は、彼自身が戦時中に背負い込んだテーマを戦後になって作品化したものだと言っています。（『めぐりあいし人びと』）それぞれ、乱世に生きた歴史の記録者鴨長明、『明月記』で宮廷文化の爛熟と衰退を克明に記した藤原定家、戦時下ナポレオンの側に立つのでもなくスペインのゲリラの側に立つのでもないフェアな立場で

『戦争の惨禍』を描いた芸術家ゴヤをあぶりだしています。

「堀田さんの本を読んでいて心地よいのは、今のソ連崩壊を目の当たりにして大化改新に連れていってくれた話のように、歴史と現在がパツとつながる。知識がいきいきと動いている感じが手に取るように感じられるからです。鴨長明や藤原定家も、ゴヤやモンテーニユも、堀田さんの手にかかる

と、我々と大して違わない現代人ですね。」（『堀田善衛を読む 世界を知り抜くための羅針盤』吉岡忍）

帰国

一九九一（平成三）年から一九九四（平成六）年にかけて、彼はフランスの哲学者モンテーニユの生涯を描いた『ミシエル 城館の人』三部作を刊行しました。そして一九九八

（平成十）年その生涯を終えるまで、新たな争乱と混乱の時代に向けたメッセージ、文明批評を発表し続けました。（『誰も不思議に思わない』『時空の端っこ』『未来からの挨拶』『空の空なればこそ』）

「十七歳から二十二歳までの読書が君の人生を決定する。本当にそうなのだ。怖いことだと思わないか。この世は君一人のものではないのだ。他というものがいるのだ。その他とは何か。どういうものであるかを、教えかつ知らせてくれるということだ。読書の中身なのだ。思慮深く、強い決断をもった人間を育ててくれる、最良の手段が読書というものなのだ。君がもう二十二歳を越えていても、遅すぎるということはない。一冊の書物を手にせよ。出版はそこからだ。」

これは『ミシエル 城館の人』の書

店販促キャンペーンのための彼の原稿です。読書について自らの経験に照らし、若者に向け強いメッセージを送っています。（『堀田善衛を読む』終章 堀田善衛二〇のことば）

主な参考資料

『堀田善衛を読む 世界を知り抜くための羅針盤』910 集英社 2018

『堀田善衛展 スタジオジブリが描く乱世。』Z^{90.A} 兵庫県立神奈川近代文学館

『時代と人間』ZY^{280.4} 堀田善衛著 2008

徳間書店スタジオジブリ事業本部

『本屋のみつくりー私の読書ー』ZY⁰¹⁹ 堀田善衛著 筑摩書房 1977

『めぐりあいし人びと』ZY^{914.6} 堀田善衛著 集英社 1993

『インドで考えたこと』ZY⁹¹⁵ 堀田善衛著 岩波書店 1980

『小さな花』914.6 カ 加藤周一著

『本でつくるユートピアー韓国出版情熱の現代史ー』023 キ金彦鎬著 館野晰訳

北沢図書出版 2015

2003

2003

2003

2003

2003

2003

2003